

「命さえあれば。」

新発田市立第一中学校 和田 かな子

「かな子ちゃん、一緒に遊ぼう！」

「ウノしようよ！」

と、話しかけてくれる小児病棟の子供達。その子供達はいつも点滴に繋がれていました。けれど、明るくて、無邪気なその笑顔は、いつも私を癒してくれました。

中学1年の秋、私は悪性リンパ腫という病気になりました。病名を聞いたとき、目の前が真っ暗になりました。「眠ってしまったら明日の朝目覚めないかもしれない」と、夜眠ることすら怖くて仕方ありませんでした。少し前まで普通の生活をしていたのに、何で私がこの病気になったの？どこにもぶつけようのない苛立ちや苦しみに押し潰されそうでした。

初めて子供達に会ったとき、皆楽しそうに遊んでいるのが、私には不思議でなりません。点滴に繋がれて治療を受けているのは私も同じなのに、どうして元気なのだろう。こんなに小さな子供達が頑張っているのに、私は……と自分が恥ずかしくなりました。そして、「私も強くなりたい。たくさん笑って病気を治したい。」と前向きに思うようになりました。小さな子供達のたくさんの笑顔が生きる希望をくれたのです。この日を境に私の心のもやは晴れていきました。

また、ある日のこと、同じ病室の女の子が主治医の先生をこう呼びました。

「先生はね、神様先生なんだよ！」

神様先生——、素敵呼び方ではありませんか。優しいその先生にぴったりです。ああ、私は何て素晴らしい先生に出会えたのだろう、そのとき気付いたのです。私がたくさんの人達にどれ程支えられていたのかを。優しい先生や看護師さん、明るく可愛い小児病棟の子供達。院内学級の先生。勉強しているときは、普通に学校にいるような気分になりました。それから第一中学校の先生や友達の励まし。そして一番身近な両親の大きな愛。たくさんの人達に支えられ、助けてもらったおかげで、私は笑顔で退院することが出来ました。

今、私には夢があります。入院を通して医療関係の仕事に興味を持ち、臨床心理士という仕事を知りました。様々な社会的要因により心の問題を抱える人へ、心理学的立場から援助を行う仕事です。

この夢への思いが強いのは、看護師さんの言葉がきっかけです。少し人が減った病棟を見て「寂しくなりましたね」と話しかけると

「でもここが空っぽになるのが私達の夢だからね。」

かな子ちゃんが退院出来る日が来るのは、先生も私達もとっても嬉しいよ。」

と。病棟が空っぽになるなんて想像したこともありませんでした。「病棟を空っぽにしたい。そうなったら幸せだな」と思ったのです。臨床心理士は病気を直接治す訳ではありません。けれど、辛い入院生活を乗り越えるためには、私が受けたようにたくさんの支えが必要です。病気を持つ方も支える方も悩みやストレスを抱えないことは難しいでしょう。だからこそ、臨床心理士としてその辛さをさらけ出せる心の居場所になりたい。今度は、助けていただいたこの命で、誰かの支えになりたい。そのために私は、この仕事を目指します。

小児病棟で病気と闘っている子供達はたくさんいます。そして、その命は今も懸命に輝いています。生きたくても生きられない人がいるという現実を私達は決して忘れてはならないのです。当たり前がどれ程幸せなことか。命を無くしてからではもう取り戻せません。

だから、誰もが一つずつ与えられているこの宝物を大切にしなければ。失敗したって大丈夫。何度でも挑戦出来ます。少しの失敗を恐れなくて。命さえあれば何だって出来るのです。臨床心理士になることが容易でないことは知っています。けれど私は精一杯生きて、夢を叶えます。それはとても贅沢なこと。生きるということ。

「命さえあれば。」希望の光は常にあります。